こだま俳壇(12 月句会)

木枯しや字に一灯あるばかり　中野みどり
玄関にひらり舞い込む枯葉かな　柳瀬節子
幼き日聖菓欲しさの信者かな　本山文子
兵士らに届けと子らの聖歌かな　角田英昭
木枯しや落葉踏む音心地よく　小室豊子
舟で行く小さき島の聖誕祭　友井眞言
月食や独り茶漬けをすすりをり　木村武子
木枯しや十五年もの戦争史　田中一男
旅の友独り旅路に急ぎ去り　後藤貞夫
クリスマスせめて停戦祈りけり　松尾佐知子
冬に入る母の命日一人酒　瀧澤正行
学友の訃報の届く冬銀河　島田多嘉子
木枯しや太白星の光増す　白井保次郎
雷鳥や雪を蹴散らし餌競う　常世田芳子
福寿草五つ並んで咲きにけり　高橋和江
木枯しの音聞くように彼は逝き　並木まり子
サイレンの風花となり消えゆけり　三井光子
学友の訃報の悼み冬銀河　島田多嘉子
着膨れて動きのにぶき介護の手　中村桂子

木枯や戦を知らぬ人増えし　講師　太田土男先生